



門真四中だより

「つながる」「わかる」「切り拓く」

令和5(2023)年3月10日

第75号

編集・発行：校長 上甲 尚

東日本大震災から12年 ～何かを知り、考え、行動すること～



(高さ10mの防潮堤を越えて襲いかかる大津波)

12年前の平成23(2011)年3月11日午後2時46分、東北地方の太平洋沖でマグニチュード9の巨大地震が発生しました。

直後に東北の三陸地方を襲った大津波で多くの命が失われ、甚大な被害が出ました。死者全国で1万5900人、行方不明者2523人(3月1日現在)という未曾有の大災害でした。亡くなられた方の約9割が津波による「溺死」でした。最も高い津波は30mを超えたそうです。ドス

黒い津波(海底のヘドロを巻き上げるので黒くなります)が街を襲い、家や建物、船や車などあらゆるものを流し去ってしまいました。およそ現実とは思えない、想像を絶する光景でした。

大津波で福島県の原子力発電所が爆発し、メルトダウン(炉心溶融と呼ばれ、原子炉の重大事故)する様子を映像で見て言葉を失いました。多くのかけがえのない命が失われ、原子力発電所の周辺の地域は人口が激減し、いまだにふるさとに帰れない人もたくさんいます。

震災当時、皆さんはまだ幼かったので、ほとんど記憶にないかもしれません。しかし、今はテレビやニュース、先生方から話を聞いてどんなに甚大な被害が出たか、少しは知っていると思います。私たちにできること、知っておくべきこと、備えておくべきことは何なのでしょう...。「3月11日」は特別な日です。もし「南海トラフ地震」が起きると、近畿地方にも甚大な被害が出ると言われています。「防災」と「命」について考え、「自分事」にしなければならないと思うのです。

大津波が街を襲った時、命がけて避難を呼びかけたある女性の話を紹介します。

「高台に避難してください」

16mの大津波に襲われ、甚大な被害を被った宮城県南三陸町の町役場(危機管理課)に勤務していた遠藤未来さん(享年24)にまつわる話を、当時(2011年4月12日)の新聞記事から紹介します。「天使の声」という題で道德の教材にもなりました。

「大津波警報が発令されました。高台に避難してください」

防災無線の呼び掛けが、多くの命を救った。だが、声の主の行方は震災から1カ月たった今も知れない。3月11日午後2時46分、宮城県南三陸町の防災対策庁舎2階にある危機管理課。町職員遠藤未希さん(24)は放送室に駆け込み、防災無線のマイクを握った。



「6メートルの津波が予想されます」「異常な潮の引き方です」「逃げてください」

防災無線が30分も続いたころ、津波は庁舎に迫りつつあった。「もう駄目だ。避難しよう」。上司の指示で遠藤さんたちは、一斉に席を離れた。

同僚は、遠藤さんが放送室から飛び出す姿を見ている。屋上へ逃げたはずだった。が、津波の後、屋上で生存が確認された10人の中に遠藤さんはいなかった。

南三陸町の住民約1万7700人のうち、半数近くが避難して命拾いした。遠藤さんは、多くの同僚とともに果たすべき職責を全うした。

遠藤さんは1986年、南三陸町の公立志津川病院で産声を上げた。待望の第1子に父清喜さん(56)と母美恵子さん(53)は「未来に希望を持って生きてほしい」との願いを込め「未希」と命名した。

志津川高を卒業後、仙台市内の介護専門学校に入学。介護の仕事を目指したが、地元での就職を望む両親の思いをくみ、町役場に就職した。同僚は「明るい性格。仕事は手際よくこなしていた」と言う。

2010年7月17日、専門学校で知り合った男性(24)と、町役場に婚姻届を出した。職場仲間にも祝福され、2人は笑顔で記念写真に納まった。

両親は当初、2人姉妹の長女が嫁ぐことに反対だった。「どうしてもこの人と結婚したい」。男性が婿養子になると申し出て、ようやく両親も折れた。ことし9月10日には、宮城県松島町のホテルで結婚式を挙げる予定だった。

美恵子さんは「素直で我慢強い未希が人生で唯一、反抗したのが結婚の時。それだけ、良い相手と巡り合えたのは幸せだったと思う」と語る。

遠藤さんの声は、住民の記憶に刻まれている。山内猛行さん(73)は防災無線を聞き、急いで高台に逃げた。「ただ事ではないと思った。一人でも多くの命を助けたいという一心で、呼びかけてくれたんだろう」と感謝する。

娘との再会を果たせずにいる清喜さんは、無念さを押し殺しながら、つぶやいた。「本当にご苦労さま。ありがとう」

(2011年4月12日 河北新報)

未希さんの遺体が見つかったのは、この新聞記事から11日後、震災から43日目の4月23日のことでした。しめやかに葬儀が行われ、会場に駆けつけた町民は口々に「あの時の女性の声で無我夢中で高台に逃げた。あの放送がなければ今ごろは自分は生きていなかったと思う」と言いながら、涙ながらに遺影に手を合わせていたとのこと。出棺の時、雨も降っていないのに、西の空にひとすじのきれいな虹が出ていたそうです...